

あいさつと礼儀

城北中学校 三年 木下 祐実

先日、実用英語技能検定を受けに行った帰りのことである。会場内の先生が「お疲れ様さまでした。」

「気をつけてお帰りください。」

と声をかけるのに対して、私より小さい、十一人の男の子が、大きな声で

「ありがとうございます！」

と言って帰っていくことに私はとても感心した。周りには、先生方の気遣いを見無視して帰る人が多くいるというのに、この男の子は素晴らしいな、と私は晴れやかな気分になった。

私は吹奏楽部で部長をしている。吹奏楽部で最も大切なことはあいさつである。部員と廊下ですれ違ったときに、必ず

「こんにちは」

と笑顔で言われるのが嬉しく、また、それが吹奏楽部の誇りでもあり特徴でもあるのだ。そしてあいさつをするのは部員同士だけではない。大会のときに他校とすれ違ったときにも必ずあいさつをする。たとえ、相手がライバル校であったとしても、部員数が多い強豪校であったとしてもだ。しかし、中にはあいさつをしない人たち、すれ違っても目さえ合わない人たちだっている。そのような人たちにもあいさつを続けるのは難しいかもしれないが、「難しい」と「できない」は違うのだと、私は思う。

先ほど書いた男の子のように、気持ちの良いあいさつをできる人は少ないのかもしれない。あいさつという行為自体、ハードルが上がってきているのかもしれない。私たち吹奏楽部は、部活でのルールとしてあいさつをしているだけで、ルールではなくなったら、誰もあいさつをしなくなるかもしれない。なぜなら、あいさつは相手に直接自分の思いを伝えるものだからだ。現代にあるインターネット上のコミュニケーションツールとは違い、相手と真剣に向き合うことが必要になるものでもあるからだ。

だからといって、自分には難しいから、自分には都合が悪いからと言い、あいさつから逃げるのは、とても悲しいことだと思う。私は、あいさつをすることを絶対とも強制とも思わない。だが、自分の弱さを放置するのは良くないことだと感じている。

私は、あいさつの良いところは二つあると考える。一つ目は、あいさつをされた側が嬉しいと感じることである。あいさつは、直接的に相手と話すことになるため、お互いの存在を確認でき、お互いを認め合うことにも繋がるからだ。そして二つ目は、周りに良い影響を与えることができることである。人のふり見て我がふり直せ、という慣用句があるように、気持ちの良いあいさつをされると自分までしたくなったり、気持ちが見えなくなったりと、あいさつには人を変える力があると思う。しかし、世の中にはあいさつが苦手な人もいる。代わりに会釈をしたり、目を合わせたりと、あい

さつをしない側では何か工夫するのが大切だと思う。自分が、できることを最大限行うことこそ礼儀だと思って私は毎日過ごしている。

私たちは、生まれてから今まで、数え切れない数の人たちと関わり、支えられ、これから生きていく。あいさつの大切さと、相手への礼儀を忘れないことがより良い社会を作る鍵になるのだと私は思う。